

リサイクルでつなくサステナブルな未来



協 ニュース

94
NOV. 2023

廃棄物から新価値を生むアップサイクルという魔法



- Index
- 1 PICKUP 廃棄物から新価値を生むアップサイクルという魔法
 - 5 インタビュー SDGsアクション 特別編
 - 7 包括的海洋ごみ対策、日本財団・瀬戸内オーシャンズXの挑戦
 - 9 容リSTUDIES プラスチック容器事業部長 前川恵士
 - 11 容リSTATION 協会の主な取り組み内容をご紹介します
 - ecoワードパスル



PICK UP

廃棄物から新価値を生む

アップサイクルとは、廃棄物となっていた容器包装や食品捨てられていたものから新たな価値を生み出すという

世界自然遺産・白神山地で育む
原材料・ウイキョウを化粧箱にアップサイクル



株式会社アルビオン

植物原料にもこだわるからこそ地球環境にやさしいものづくりを推進

高級化粧品メーカーとして、自然環境に影響を与えないものづくりを一貫して目指してきた(株)アルビオンでは、環境にやさしいパッケージの開発に注力してきました。その一環として、化粧品原料である植物の残渣をアップサイクルした紙をスキンケアシリーズ「イグニス」の化粧箱に採用しています。

「弊社は原材料となる植物にこだわり、その力を最大限に引き出すような商品づくりをしています。2010年には、緑豊かな世界自然遺産・白神山地(秋田県藤里町)のふもとに閉園した保育園を借り受けて『アルビオン白神研究所』を設立し、現在は11万m²の圃場で自ら手塩にかけて植物を育てています。なかでも白神産ウイキョウは、『イグニス』のほぼすべてのアイテムにそのエキスが配合されている、いわばこのシリーズの象徴ともいえる存在です。だからこそ、エキスを抽出するウイキョウの果実だけでなく、通常なら廃棄されてしまう茎や葉の部分も余すことなく使いたいと考え化粧箱に活用することになりました」(嶋村信彦氏)

森林保護や廃棄物リサイクルの観点から、非木材紙の利用を進めてきた同社では、化粧箱にサトウキビを搾汁したあとの搾りかすであるバガスと再生紙を原料とした紙を使用しており、そこにウイキョウの葉や茎を粉碎して練り込んでいます。「バガスだけではなく『イグニス』の象徴であるウイキョウを

自社栽培する白神産ウイキョウの茎や葉を粉末化して紙に練り込み、天然資源を有効活用。

加えることで、原材料へのこだわりやものづくりへの想いなどのメッセージを込めることができていると思います」(山本忠臣氏)

実はウイキョウの茎や葉を紙の原料となる繊維にするのは非常に難しく、試行錯誤した結果、粉末化してバガスなどの繊維に混ぜ込むことになったそう。

「化粧品の場合、成分表示が義務付けられていますから、化粧箱に使用する紙には細かい文字でもしっかり読めるように印刷できるクオリティが求められます。その辺りに開発担当者は相当苦心したようです」(嶋村氏)

同社ではさらなるアップサイクルの試みとして、2021年



再生紙やサトウキビの搾りかすバガスとともに、原材料であるウイキョウの茎や葉の粉末を化粧箱としてアップサイクルするスキンケアシリーズ「イグニス」。ショップバッグには、サステナブルな森林認証紙も採用されています。



「ALBION RECYCLE PROJECT」で回収したボトルキャップからアップサイクルされたミニフォトフレーム(右)。その外袋(左)には、店頭スタッフの制服再生材を混ぜた紙が使用されています。



株式会社アルビオン 経営企画部サステナビリティ戦略グループ グループ長 嶋村信彦氏(右)と、同グループ専門課長 山本忠臣氏(左)。

アップサイクルという魔法

残渣などを、価値のあるものに生まれ変わらせること。

まるで魔法のような取り組みによって、日々、新たな驚きが届けられています。

に「HAPPY RECYCLE PROJECT」と銘打ち、循環型社会の実現に向け容器回収システムの実証実験を開始しています。当初は横浜にある「アルビオン フィロソフィ」の店頭のみで薬用スキンコンディショナー エッセンシャルの使用済み容器を回収し、再資源化するリサイクルキャンペーンを実施。また、この活動を通じて回収された容器のキャップをミニフォトフレームとしてアップサイクルし、回収活動に協力してくれた顧客にプレゼントしました。その後、回収拠点を順次増やして取り組みの規模を拡大し、2022年からは「ALBION RECYCLE PROJECT」として新たに展開。現在では、全国57店舗で回収活動を行っており、回収容器のボ

トル部分もアップサイクルに向けた検証が始まっています。

「現段階では、アップサイクルできたのはキャップ部分のみです。ボトル部分についてはまだ、ペレット化してどう活用していくのか協力業者と模索しているところですが、ゆくゆくはきちんと資源循環できるようにしていきたいと考えています」(山本氏)

目下、回収対象となっているのは1商品のみですが、「ほかの商品の愛用者様からも回収活動に参加したいという声が寄せられています」(山本氏)と、ユーザーアンケートでも多くの支持を得ているこの取り組み。これからも原材料や容器のアップサイクルが期待できそうです。

世界自然遺産・白神山地を リモートインタビュー

アルビオン白神研究所は、国内で5カ所、本州には1カ所しかない世界自然遺産に登録されている白神山地のふもと、秋田県藤里町にあります。この地を選んだのは白神山地の名水がきっかけでした。国内でも珍しい硬度19の軟水は、金属イオンが少なく肌への刺激も少ないことから化粧品づくりにはぴっ

耕作放棄地の農地利用や環境に配慮した植物栽培、地元の農業系高校卒業生の採用などを通じて、地域活性化や環境保全、雇用創出に貢献。



包括連携協定を締結し、地域貢献も

究極のトレーサビリティと原料の肌に対する
効能効果の最大化を追求しています



アルビオン白神研究所
所長 小平 努氏

たりだったのです。2010年には藤里町から閉園した保育園(表紙写真)を借り受け、ここを研究拠点として活動していく傍ら地域社会への貢献にも努め、2017年には包括連携協定も締結しました。この研究所は化粧品原料となる植物の研究を行う施設だけではなく、

薬用植物の力を最大限引き出すべく、有機栽培を行うための畑も有しています。2018年には有機JAS認証も取得しました。原料となる植物とまっすぐに向き合いたいという思いから、自ら生産者となってほとんど手作業で栽培していますが、雇用の面でも地域貢献を行っています。除草剤や農薬を使用せず環境に配慮しながら原料を収穫し、洗浄、加工、出荷まで自社で手掛けることで、究極のトレーサビリティを確保しつつ、その植物原料の肌に対する効能効果の最大化を得ることを目指しています。化粧品メーカーが薬用植物を育てるところから手掛けるのは非常に珍しく、独自の取り組みですから、広報活動として我々現場からも、地元ラジオやSNSなどを通じて積極的に情報発信にも努めています。



藤里町町長
佐々木 文明氏

小平所長は、2022年に赴任されたばかりですがすっかり人気者で町内のイベントも盛り上げてきています。アルビオンさんは包括連携協定締結前から、地元の雇用創出や地域活性化に大きく寄与してくれていますが、特に驚いたのはワイナリーの開設でした。藤里町の名産品のひとつだった「白神山地ワイン」は、藤里町で栽培したブドウを他県の醸造所へ持ち込んで醸造していましたが、2018年に「果実酒等の製法品質表示基準」が改定されたことにより、この手法では「白神山地」と表示できなくなり生産が途絶えてしまいました。しかし、同社が廃業した農家からブドウの木を譲り受け、化粧品原料とすべく栽培をはじめ、さらにはその果汁でワインまでも生産してくれたことで2022年に復活できたのです。



コーヒーの副産物をアップサイクルする「Coffeeloopプロジェクト」



アサヒユウアス株式会社

目指したのはサーキュラーエコノミーの実装事例 地域連携による資源循環プラットフォームも始動開始

2022年1月に設立されたアサヒユウアス(株)は、事業内容を「循環型社会形成につながること」「地域課題解決につながること」の2点に絞り、サステナビリティ事業を展開している会社です。

「メーカーはリサイクルに偏りがちですが、資源循環を回し続けるには経済活動によって環境を良くするサーキュラーエコノミーこそが重要です。しかし実装できている例はほとんどありません。その実例を示すべく、2022年1月にアサヒユウアス(株)を設立しました」(古原徹氏)



「循環型社会形成と地域課題解決に関することならなんでも取り組みます。『アップサイクルに関することならユウアスに』と言われる存在を目指しています」と語るアサヒユウアス株式会社のしきユニットユニットリーダーの古原徹氏。

そして2023年4月、サーキュラーエコノミーの構築を目指す「Coffeeloopプロジェクト」を開始。その第一弾として販売開始されたのが、繰り返し使用可能な「Coffeeloopカップ」です。企業向けのフードサービスを提供しているコンパスグループ・ジャパン(株)から仕入れたコーヒーかすに、間伐材の木粉、(株)メニコンのコンタクトレンズ工場から出る未利用端材を混ぜてバイオプラを製造するため、新規プラスチックを利用せずにコーヒーカップを製造することがで



Coffeeloopカップをはじめ、間伐材を使用した「森のマイボトル」「森のタンブラー」など、エシカルなもののづくりを通じて、サーキュラーエコノミーの構築を目指しています。

きます。このカップはすでに、コンパスグループが運営するカフェをはじめ、ホテルや飲食店で導入が進められています。

「コーヒーかすをプラスチックと混ぜるには粉末状

にする必要がありますが、油分を多く含むため微粉末にするのが難しく、また成型する際もコーヒー由来のガスが発生してしまうので均一になりにくいなど、開発は一筋縄ではいきませんでした。さらに、バイオプラであっても食洗機を使用できるよう、カップにはウレタンコーティングを施しましたが、そこにも高い技術が要求され、山中漆器の職人に“塗り”を依頼しています」(古原氏)

原料の仕入れから製造まで、パートナーとの連携により実現したこのプロジェクトは、2023年9月には墨田区資源循環・地域連携促進補助事業「すみだCoffeeloopプロジェクト」に発展。墨田区の福祉作業所の通所者が区内のカフェや企業から回収したコーヒーかすを使用してつくったカップを、協力店舗で使ってもらおうという地域連携モデルになります。将来的には製造も区内工場で実施し、すべて墨田区内で循環することを目指します。

「これを実装例として、Coffeeloopの輪を広げていきたいですね」(古原氏)



奥にあるのは“塗り”を施す前のCoffeeloopカップ。手前右が一度塗り、手前左がリペアして塗りを重ねたもの。塗りが剥けてもリペアして繰り返し使用できるのもCoffeeloopカップの強みです。



Coffeeloopのペレットからは、カップ以外にもちやのブロックなども製造されました。店舗の什器として活用したこともあるこのブロックからは、ほんのりコーヒーの香りがします。

写真奥が、本プロジェクトで製造されたバイオプラのペレット。コンタクトレンズ工場から出た端材(左)は未利用の良質なポリプロピレンですが、高度管理医療機器に指定されているコンタクトレンズをつくらぬ工場では再利用できず、これまでは有効活用されていませんでした。



一般社団法人アップサイクル

第一弾は廃棄対象の紙資源から生まれた紙糸「TSUMUGI」プロジェクト

これまで廃棄されてきた利用可能な資源の活用に取り組むため、さまざまな企業・団体が連携できるよう懸け橋となっている（一社）アップサイクル。同法人の参画企業の一つであるネスレ日本（株）では、以前からコーヒーの詰め替え用製品や大袋の菓子の包装容器の紙パッケージ化に取り組んでいました。しかし、製造工程で一部生じる印刷のずれや、消費者が使い終わったあとのパッケージなど、どうしても廃棄になる紙が発生してしまいます。また、家庭から排出される紙製容器包装は年間74.3万トン^{*}ですが、実際に製紙原料に再利用されているのは約1.9万トンと約2.6%に過ぎないことも大きな課題だと考えていました。

「これらの課題を解決できないかと模索していた際に日清紡グループさんから、和紙でつくる“紙糸”の存在を聞きました。そこで、和紙ではなく使用後の紙を使って紙糸をつくれなにか挑戦してみることになったんです」（瀧井和篤氏）

紙を細かく裁断して撚りをかけ糸にしていくのに、再生紙の厚みやどれくらいの細さに裁断するかなど、試行錯誤すること約一年半。ようやく再生紙と間伐材からアップサイクルした紙糸「TSUMUGI」が2022年2月に完成し、「ネスカフェ」直営店のエプロンなどに活用されました。

^{*} 出典：日本容器包装リサイクル協会「リサイクルのゆくえ 紙製容器包装」（令和4年度）



「TSUMUGI」によって神戸市との協働でつくられた子ども用Tシャツ。独特のしゃり感のある風合いで、吸湿性が高く、とても軽いのが特徴。養護施設の子もたちに贈られました。ネスレ日本（株）の社員である瀧井和篤氏は、公益性を保つために向向ではなく、個人の副業として一般社団法人アップサイクルの事務局長を務めています。

「再生紙で紙糸をつくることには成功しました。しかし食品会社であるネスレ日本1社では、リサイクル率向上という課題の解決までには至らずどうしたものかと考えていたところ、神戸市さんから“紙資源を回収して児童養護施設の子もたちに『TSUMUGI』でつくった服を提供できないか”と申し出があり、回収に取り組んだところわずか2カ月で110kgもの紙パッケージが集まりました。紙容器はごみではなく、価値あるものに生まれ変わるということを伝えれば、人々の分別や回収の意欲を向上させることができると実感できました」（瀧井氏）

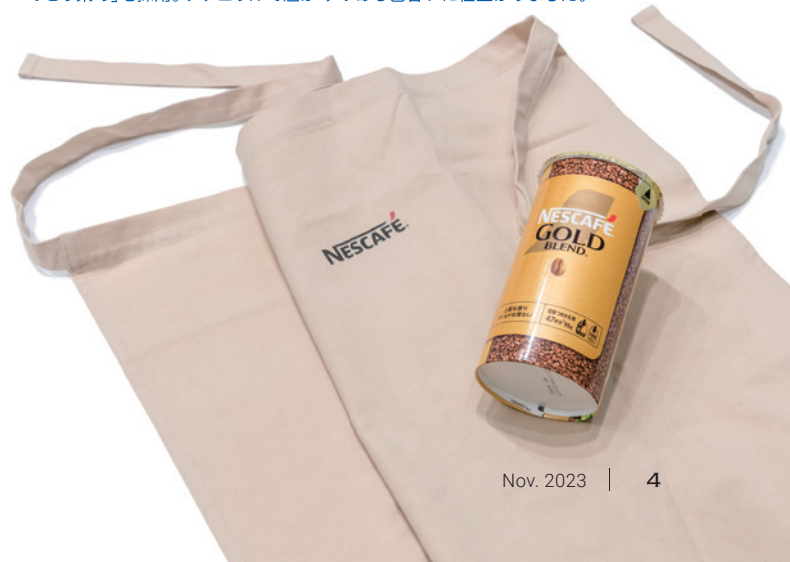
その後も協力を申し出る企業や団体が相次いだことから、皆で連携して各々の強みを生かせるプラットフォームを生み出そうと一般社団法人を立ち上げたのが2023年2月のこと。現在では、抽出後のコーヒー残渣を発酵させてつくった麴を使用した食品づくりなど、「TSUMUGI」プロジェクトに続く新たなプロジェクトへと発展しています。

「ネスカフェ」の直営店で使われるエプロンは、染めにも抽出後のコーヒー残渣による「のこり染め」を採用。ナチュラルで温かみのある色合いに仕上がりました。



「TSUMUGI」の原料となる牛乳パックやコーヒーの詰め替え用パッケージ。

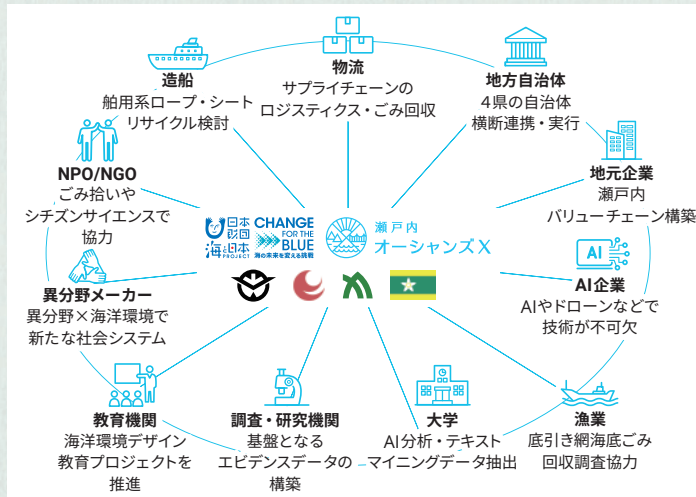
アップサイクル紙糸「TSUMUGI」とそれを使用して織られた布。写真奥は「TSUMUGI」100%の布で、手前は京都嵐山の車折神社とコラボしたハンカチ。



包括的海洋ごみ対策、日本財団・瀬戸内オーシャンズXの挑戦

子どもたちに海の大切さを知る機会を提供しようと、2015年に「海と日本プロジェクト」を始めました。8年で協力団体は1万を超え、累計1千万人以上の方々に関わり、海のプラットフォームとしては日本最大、世界でも有数のプロジェクトとなったのではないかと考えています。そこから、海洋ごみに特化したプロジェクトとして「CHANGE FOR THE BLUE」が2018年に発足しました。日本全体で連帯し、海洋ごみを出さない、海の未来を変えるという挑戦を続けています。その一環として2020年には、一つの地域でNGO、行政、企業、教育関係者などが一体となった包括的な海洋ごみ対策モデルをつくらうと「瀬戸内オーシャンズX」が生まれました。瀬戸内海は外からのごみがほとんど入らない閉鎖性海域のため、当事者意識をもって取り組んでもらえ、対策による効果・成果も可視化しやすい理想的な場所でした。

瀬戸内オーシャンズXで重視しているのは、科学的なデータによるエビデンスです。研究者や地図の専門家の協力も得て、瀬戸内海の280の河川を徹底的に調査し、海洋ごみの8割が陸からきたものであることや、ごみの溜まりやすい「ホットスポット」があることも判明しました。岡山県・広島県・愛媛県では、一般の方が簡単に立ち入ることができない離島や半島の先端部、あるいは河川の河口部で、特殊機材を用いた大規模清掃を行いましたし、香川県では川をせき止め、2kmにわたって水を抜いたうえで効率的な清掃活動を実施しました。4回の清掃で計14トンのごみが回収できました。瀬戸内では自治体の意識や、海をよく知る漁業関係者の参加率も高くなっています。調査によるエビデンスを柱に企業や自治体



「瀬戸内オーシャンズX」は、瀬戸内海に面する岡山県、広島県、香川県、愛媛県と日本財団で進める海洋ごみ対策プロジェクト。2022年に日本財団が5億円の基金を設置し海洋ごみ対策を助成している。



日本財団 笹川陽平会長と4県の知事がリモートで参加した調印式の様子。

を巻き込んだ地域連携を生み出し、マスコミの協力を得て教育・啓発活動も行い、地域の行動変容を起こす。そのうえで、政策づくりにつなげるという流れで進めています。

民間と自治体で包括的に進める「瀬戸内モデル」ができれば、太平洋島しょ部など応用できる地域に持っていくことも考えています。日本財団では現在、世界的にも影響力があり、重要な経済誌のひとつである英『エコノミスト』誌と、海洋問題のプロジェクトを行っています。2025年3月には、共同で大規模な海洋国際会議「ワールドオーシャンサミット」を東京で開催する予定なので、そこで「瀬戸内オーシャンズX」の成果も世界に共有したいと考えています。



“人々の意識が変わるなか、特に高校生は積極的。SNSで世界の仲間とつながり行動力もある彼らは、社会課題解決においてはもはや啓発対象ではなく、パートナーとして同じ目線で一緒にやっていきたい存在です”

海野 光行氏 日本財団 常務理事

うんの・みつゆき ● 1990年に日本財団(当時は日本船舶振興会)に入会。国内の福祉事業や財団の広報を経験したのち、2000年に海洋部門に配属。2011年からは常務理事として海洋部門を統括し、「次世代に海を引き継ぐ」をテーマに国内外の海洋に係るプロジェクトを担当。2021年に「海の日」海事関係功労者大臣表彰を受賞。



「行動の10年」(Decade of Action)は、貧困やジェンダーから気候変動、不平等、資金不足の解消にいたるまで、世界の最重要課題すべてについて、持続可能な解決策を加速度的に講じることを求めています。



この日は地元の金融機関や商会議所青年部の皆さん、部活動の一環として参加する高校生など約80人が参加。CMなどで認知度も上がり、多様な主体が積極的に参加する活動に。

2023年9月16日、「瀬戸内オーシャンズX」の一環として岡山県・白石島で「海ごみゼロ作戦」と題した海岸清掃が行われました。主催する一般社団法人みんなでびぜんの成り立ちは、38年前から地元の海で行うアマモの再生活動。さまざまな形で美しい海を守っています。



「みんなでびぜん」活動レポート

(一社)みんなでびぜんでは、子どもたちに海の大切さを知る機会を提供するなか、清掃活動も積極的に行っています。代表理事・船橋美可氏は、「海洋ごみの存在をまずは知ってもらうことを重視し、短時間で終わるようにするなど誰でも参加しやすい工夫を重ねています」と教えてくれました。学校の授業などをきっかけに自発的に参加する学生も多く、この日も「レポートで調べたときに想像していたのよりごみが多かったです」と話してくれたのは、地元の高校3年生。学校のボランティアサークルには100人以上が参加しているそうで、意識の高さが伝わります。「瀬戸内オーシャンズX」で行う清掃活動などの運営以外にも、「多くの人に関わり感動して思い出になることで持続可能になる」(船橋氏)と、環境活動という枠組みを超えてここでしかできない体験づくりにも取り組みます。修学旅行で、海岸清掃と地元の魚介料理をセットで体験してもらったことも。「地域の歴史と文化を知ることができた学生にも地域にも喜ばれ、活動の幅が広がりそうです」(船橋氏)

小さな街だからこそ、地域と協力できることはまだまだあります。海を守る企画を実行できる地域の体制づくりを、日本財団の助けを借りながら進めています。

一般社団法人みんなでびぜん 代表理事・船橋 美可氏



今回のような清掃活動ではその活動成果からもエビデンスデータを取得しており、その情報は「データプラットフォーム」に集約され公開されています。こういった「見える化」も、自分ごととして捉えてもらう工夫のひとつ。



友人同士で自主的に参加した地元の高校3年生。

Voice 本州・四国それぞれを代表してお話をうかがいました

日本財団のリーダーシップが、問題意識のある人たちをつないだことを実感しています。特に高校生の意識は高く、清掃活動などのボランティアでは50人の枠もすぐに埋まります。担当部署には民間団体からの問い合わせも増え、市役所としても一人一人が行動するきっかけになればと、できるかぎり協力できるよう知恵を絞っています。

丸亀市役所 市民生活部生活環境課 副課長 野本 あゆみ氏(右)
同課 環境保全担当 宮前 融氏(左)



地元の漁師で始めた清掃活動は、ごみの処理費用の課題もあり自分たちだけでは続けられないと不安に思っていました。「瀬戸内オーシャンズX」をきっかけに一般の方々が問題を知り、参加してくれるようになりました。海岸のごみのほとんどが街から流れたペットボトルなどなので、多様な関係者で協力して管理し、同じ思いで地元の環境を守っていきたいですね。

笠岡市漁業協同組合理事・北木島支所長 藤井 和平氏



「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」(プラ新法)に基づくリサイクルが令和5年4月1日から運用開始となりました。プラ新法は、プラスチックの資源循環の促進等を総合的かつ計画的に推進するために①設計・製造段階、②販売・提供段階、③排出・回収・リサイクル段階の3つの段階ごとに柱となる取り組みを示しています。今回は、自治体と生活者が深くかかわる③排出・回収・リサイクル段階における運用面の変化と課題、当協会の役割について解説します。

製品プラを容リプラ(プラスチック製容器包装廃棄物)と一緒に回収。初年度の現状は？

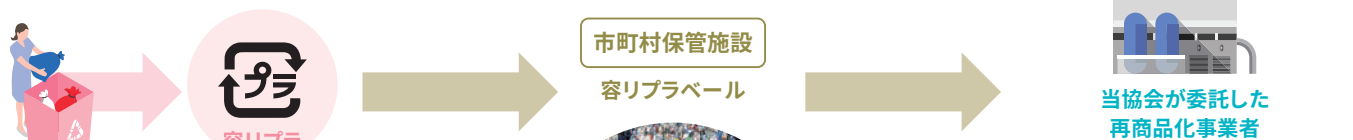
プラ新法の運用が始まり、③排出・回収・リサイクル段階で大きく変わった点は、多くの自治体ではこれまで容リプラだけが「資源物等」として収集されていましたが、そこに「可燃物等」として収集されていた製品プラも一緒に回収できるようになったことです。プラスチック資源収集量を拡大するため、従来は焼却処分されていた製品プラも資源として回収し、資源循環をさらに進めることを目指しています。運用面では、自治体や生活者の負担を減らすため、容リプラも製品プラも「資源物等」として一緒に回収し、協会に再商品化を委託することができますし、既に別々に回収していた自治体はそのまま別々に再商品化を委託することもできます。令和5年度の引取量は、容リプラが32,536トンで製品プラが6,732トンとなっています。

初年度の運用に関して一番大切なのは、その品質を注視すること。製品プラの混入によって排出されるプラスチック

の種類や品質がどのように変化するか、またそれが再商品化製品の品質にどのような影響を与えるかを把握する必要があります。製品プラには容リプラのように食品残渣が付いていないため再商品化の品質が高くなる可能性もありますが、仮に悪くなっていれば利用事業者に迷惑をかけてしまいますので、品質レベルが確認できるまでは分けて管理する必要があると考えます。ここは自治体にも、中間処理施設でも区分管理を徹底するようお願いしています。

また、製品プラと一緒に回収されることで、従来の容器包装リサイクル法(容リ法)に基づく容リプラでも混入の多い加熱式たばこ機器や、小型扇風機などの小型プラ製品に含まれるリチウムイオン電池の混入による発煙・発火事故の増加が懸念されます。市町村には混入防止のための住民啓発や収集品目の慎重な選定、中間処理施設での禁忌品・異物除去の徹底にもご協力いただきたいと思っています。

【プラ新法施行前の容リ法ルートでの運用イメージ】



【プラ新法施行後可能となった当協会ルートでの運用イメージ】





資源循環を推進するために

市町村、生活者の方

皆さんの協力が必要です

前川 恵士

業務執行理事・プラスチック容器事業部長

プラ新法で費用負担はこうなる。交付金なども用意。

プラ新法では、再商品化費用の負担は容リプラと製品プラとは異なります。容リプラに関する再商品化の費用は、1%は小規模事業者分として市町村が負担し、残り99%を特定事業者が負担します。しかし、製品プラの再商品化の費用は全額市町村負担となるので、回収したプラに占める製品プラの割合はしっかりと確認する必要があります。そこで市町村、当協会それぞれで組成調査と呼ばれるサンプリング調査を行って結果を共有し、この調査で確認された割合で費用負担の比率を決めています。製品プラの再商品化については、国でも市町村に対する交付金などを設けてその活用を促しており、令和5年度は35市町村が申し込みをしています。

令和5年度の分別収集物における落札単価は容リプラが59,856円/トン、製品プラが63,005円/トンでした。この入札に関して、費用負担者である市町村は、製品プラについて

の上限価格の設定や指名競争入札時の取り扱いを選択することができます。また、再商品化に関しては当協会に委託する方法以外にも、国による再商品化計画の認定に基づくリサイクルを行う方法もあります。例えば、市町村が再生処理事業者と組み、異物除去などの中間処理を一体化・合理化することで、認定条件である「トータルの処理費用を下げる」ことにつながられます。

環境省によれば、プラスチック排出量は2030年までに最大170万トンになるとも言われています。このような状況に対応するため、再生処理能力を増やす必要があり、国も再生処理事業者の設備投資に対する補助金制度を設けています。当協会の総力とともに関係主体の知恵もお借りし、プラ新法の目指すプラスチックの資源循環が円滑に推進されるよう貢献していきます。

プラ新法の3つの柱

1

設計・製造段階



リデュース

解体しやすい



素材代替

環境配慮設計に関する指針を策定し、特に優れた製品設計を国が認定する

2

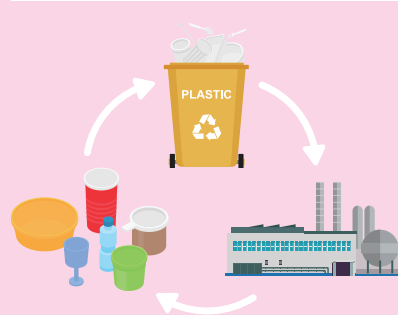
販売・提供段階



使い捨てプラスチックを提供する小売・サービス事業者などにリデュースの取り組みを求める

3

排出・回収・リサイクル段階



家庭や事業所から排出されるプラスチック資源を回収・リサイクルしていく



協会の主な取り組み内容をご紹介します

容り STATION

1 STATION

令和6年度の再商品化委託申込は 令和5年12月6日～ 令和6年2月9日です

今年は12月6日から委託申し込みが始まりますので、ご準備をお願いします。手続きについてはホームページをご確認ください。

① 再商品化委託申込契約は単年度契約です。令和6年度の事業において再商品化義務の対象がある場合には申し込み、ない場合には非申し込みの手続きが必要です。

② 委託申し込み手続きは動画で確認できます。



③ 「容器包装リサイクル制度説明会・個別相談会」を開催します。会場によっては個別相談会のみで開催もあります。

① 詳しくはこちらから ▶



お問い合わせ

容り制度、委託申込 に関するお問い合わせは…



コールセンター

03-5251-4870
03-5251-4871
03-5251-4872

オンライン手続き に関するお問い合わせは…



オペレーションセンター

03-5610-6261

お問い合わせは メールでも受け付けています
contactinfo@jcpra.or.jp



私たちがお答えします!

2 STATION

令和5年度下期PETボトルの 落札結果をホームページに掲載

PETボトルは、上期(4月～9月)と下期(10月～翌年3月)の年2回に分けて入札を行っており、7月11日～7月31日にかけて令和5年度下期分の入札が行われました。令和5年度下期PETボトルの加重平均落札単価は、-42,648円/トンと前年下期(-115,369円/トン)より72,721円/トン逆有償化が進みました。

主な要因は2022年6月をピークに原油価格が下落に転じ、バージンPET市況も連動し下落に転じたこと。また、再商品化製品の繊維、シートの販売数量低下も逆有償に進んだ要因の一つであると考えられます。

なお令和5年度通期では-52,444円/トン、令和4年度通期(-87,210円/トン)に比べ34,766円/トンと逆有償化が進みました。

PETボトル落札単価(加重平均、消費税抜き)

単位：円/トン

	令和5年度	令和4年度	増減
上期	-60,376	-64,196	3,820
下期	-42,648	-115,369	72,721
通期	-52,444	-87,210	34,766

※ 令和5年度下期PETボトル入札においては、令和5年度市町村申込量203,455トンの44.7%に相当する91,029トンを対象としました。

※ 表示している落札単価は、「有償分」と「逆有償分」の総合計の金額を入札対象量で除した加重平均の値です。マイナスは有償を表しています。

※ 通常当協会では、特定事業者からの申込に基づいて支払いいただいた「再商品化実施委託料」を原資に、再生処理事業者に再商品化を委託します(逆有償)。逆に、再生処理事業者が協会にお金を支払って再商品化を受託する状況を「有償」と言います。有償で得られた収入は市町村に拠出されます。

① 詳しくは協会ホームページよりご確認ください ▼

News & Topics

<https://www.jcpra.or.jp/news/tabid/101/index.php?Itemid=2195>



落札結果

https://www.jcpra.or.jp/recycle/related_data/tabid/1193/index.php





「JAPAN PACK 2023」に初めて出展しました

令和5年10月3日～6日、東京ビッグサイトにて開催された「JAPAN PACK 2023」（主催：一般社団法人日本包装機械工業会）に当協会が初めて出展しました。JAPAN PACK（ジャパンパック）は、包装業界および関連業界の最新鋭機器・技術・サービスとそのユーザー・バイヤーが一堂に会する2年に一度の大型商談展示会です。来場される容器・包装に携わる事業者に対し、容器包装リサイクル法の啓発と再商品化の義務不履行いわゆる「ただ乗り」は法令違反であるとの注意喚起を実施し、また未申し込み事業者に対し再商品化委託申し込みを促しました。



容り協ブースの様子。



新理事長・理事が就任しました

令和5年6月29日に開催された令和5年度定時評議員会終了をもって、代表理事理事長の澤田道隆氏、理事・プラスチック容器事業部長の石川昇氏が任期満了により退任しました。引き続き臨時理事会が開かれ、金子眞吾代表理事理事長、吉田雅治理事・PETボトル事業部長が、それぞれ新たに選任されました。



代表理事理事長
金子 眞吾

※ 現職：TOPPANホールディングス株式会社 代表取締役会長



理事・PETボトル事業部長
吉田 雅治

※ 前職：コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社 CSV推進部 CSV企画課 リーダー



容り協日誌（令和5年9月～11月）

● 容り協行事

- 9月4日 令和5年度下期PETボトル 落札結果概要・落札結果一覧・落札数量をホームページに掲載
- 14日 令和6年度市区町村からの引き渡し量に関する調査結果をホームページに掲載
- 10月2日 令和5年度下期PETボトル 落札結果をホームページの落札概要・一覧表ページに反映
- 12～18日 紙容器事業委員会、プラスチック容器事業委員会、PETボトル事業委員会、ガラスびん事業委員会、総務企画委員会
- 19日 臨時理事会
- 23日 令和6年度市区町村申し込み開始（11月15日まで）
- 11月1～8日 市区町村担当者説明会
- 中旬 令和6年度登録事業者リストをホームページに掲載予定
- 中旬 令和6年度再商品化に関する入札についてホームページに掲載予定



令和5年度 市区町村からの引取実績 再商品化製品販売実績

1. 引取実績

		4～9月累計	
		引取量(トン)	前年同期比(%)
ガラスびん		156,231	95.6
内訳	無色	46,602	97.6
	茶色	49,156	96.5
	その他色	60,474	93.4
PETボトル		110,988	92.0
紙製容器包装		6,775	68.5
プラスチック製容器包装		328,432	95.2
内訳	白色トレイ	161	98.2
	プラスチック	328,271	95.2

2. 再商品化製品販売実績

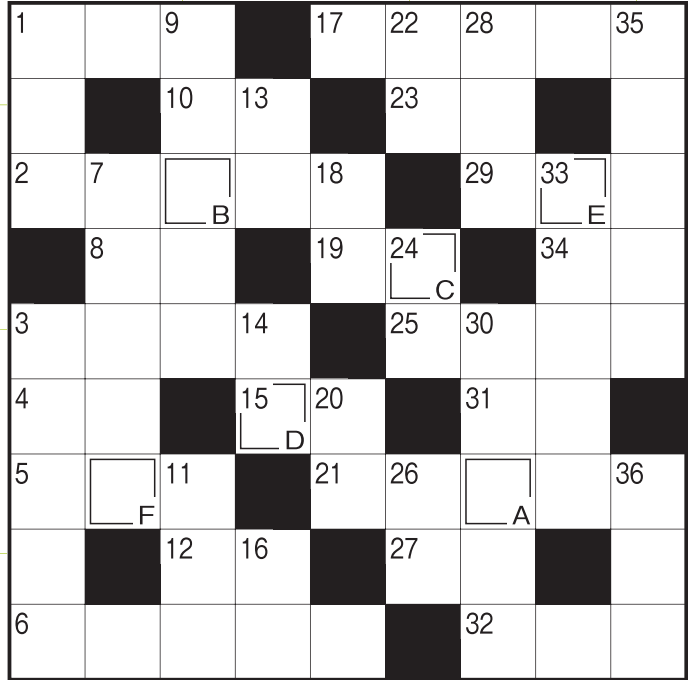
		4～9月累計	
		販売量(トン)	前年同期比(%)
ガラスびん		144,579	90.8
内訳	無色	42,286	93.9
	茶色	46,444	93.0
	その他色	55,850	86.9
PETボトル		86,709	88.4
紙製容器包装		6,973	71.1
プラスチック製容器包装		225,754	96.4
内訳	白色トレイ	147	96.8
	プラスチック	225,607	96.4



eco

ワードパズル

パズル制作/ニコリ



問題

ヨコとタテのカギを読んでマス目を埋めよう。
A-Fの文字を並べてできるECOワードはなに？

ルール◎文字はすべてカタカナで、1マスに1文字を入れてください。小さい文字(ヤ、ヨ、ユ、ツなど)は大文字として扱い、長音「ー」は1マスに入れ、濁点・半濁点は取り出さず清音と区別します。

タテのカギ

- 1 子どものこと。○○○福祉
- 3 物語の終幕の部分。もとはイタリア語
- 7 SDGsの目標7は「○○○○○をみんなに、そしてクリーンに」
- 9 半分の半分
- 11 赤十字の本部があるジュネーブは、この国の都市です
- 13 全部の。○○スイング
- 14 そばやうどんを○○につけて食べます
- 16 がっかりした時に落とす部分
- 18 イラストなどで示すこと
- 20 売ったり買ったりする場所
- 22 吸ったり吐いたりします
- 24 神仏の教えに従うこと
- 26 ○○ガラス ○○チョコ
- 28 将来のことを推測すること
- 30 漢字で「明明後日」と書きます
- 33 パラシュートのこと
- 35 社会により影響を与える活動やサービスは、○○○○○グッドと呼ばれています
- 36 ある区切られた土地のこと。自分が住んでいる○○○のことも考え、住み続けられるまちづくりをしていきたいですね

ヨコのカギ

- 1 SDGsは○○○可能な開発目標のことです
- 2 英国の皇太子(王太子)はプリンスオブ○○○○○と呼ばれます
- 3 ヨーグルトには○○○○ソースをかけて食べています
- 4 ほかの人とちがう意見。○○を唱える
- 5 看護師さんのことです
- 6 店頭で金銭のやりとりをする場所。略称で呼ぶことも多い
- 8 おすし屋さん「新鮮な○○、そろってるよ」
- 10 使っていない電気製品のスイッチを○○にした
- 12 10本足です
- 15 矢をつがえて放つ武器
- 17 タンパク質、脂質、炭水化物は三大○○○○○と呼ばれることも
- 19 不等○○ 方程○○ 計算○○
- 21 作物が収穫された土地のこと
- 23 応用の前に○○をしっかり学ぼう
- 25 環境や社会に配慮した製品を選んで消費することを、○○○消費と言います
- 27 卯年と巳年の間は○○年
- 29 日々の○○○のなかで、環境についても考えていきたいですね
- 31 天然繊維の一種
- 32 気象状況のこと。SDGsの目標13は「気候変動に具体的な対策を」
- 34 ワックスを塗って○○を出した

パズルの答えと
ecoワードの
解説はコチラ



リサイクルでつなぐサステナブルな未来
容協ニュース No.94 2023年11月発行

編集・発行：公益財団法人 日本容器包装リサイクル協会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政福祉琴平ビル 2階
(企画広報部)tel.03-5532-8610 fax. 03-5532-9698
URL : <https://www.jcpra.or.jp/> ●禁無断転載



この用紙は、FSC®認証材および管理原材料から作られています。